

The Learner

Doshisha International Academy Elementary School

November
ISSUE



November, 2026
Volume 172

「与えんがための人生」

1890年1月27日、同志社礼拝堂前で挙行された新島襄の葬儀には、約4,000人もの人々が参列したそうです。その時、勝海舟は一本の幟のぼりに新島の人生を総括する言葉を揮毫きごうしました。

「彼等は世から取らんとす、我等は世に与えんと欲す」。

新島は自らを空しくし、世のため、生徒や教職員のため、教育・募金・伝道活動に邁進する日々をすごしました。新島を敬愛した徳富蘇峰も、その生涯を次のように表現しました。

「新島先生の根本義は、取らんが為めの人生にあらず、与へんが為の人生なり。而して先生は実に其の全心と全身とを以て之に殉じたり。乃ち先生は世に与へんが為めに生き、世に与へんが為めに死せり。これが先生の悲願であり、且つ先生の感謝なりき。」（『新島襄先生』1952年、134頁）

翻って現代社会を見渡すと、自らの利益追求に汲々とし、他者の命や尊厳を顧みない風潮が広がっているように思えます。ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルによるガザ地区での殺戮と深刻な人権侵害。国家の利益や安全保障の名のもとに、多くの命が奪われています。自国第一主義が国際協調を揺るがし、利益優先の経済活動が格差や環境破壊を引き起こしています。自分たちさえ豊かで安全であればよいという考え方が、対立と分断を深めているのではないのでしょうか。

しかし、このような時代にも「与えんがための人生」を実践する人々がいます。北九州市を拠点とする認定NPO法人「抱樸ほうぼく」の理事長、奥田知志さんもその一人です。牧師でもある奥田さんは、長年、住まいを失った人々や生活困窮者を支

えてきました。食事や住居の提供だけでなく、人と人とのつながりを回復するための伴走型支援を実践されています。ご講演を伺う機会がありましたが、最後まで絶対に誰もひとりにしない、という決意がひしひしと伝わってきました。

インドのコルカタで活動したマザー・テレサも、貧困や病気に苦しむ人々のために生涯を捧げました。「死を待つ人の家」では、死に瀕した人々が尊厳を保ち、見守られながら最期を迎えられるよう尽くしました。

医師の中村哲さんは、アフガニスタンなどで医療活動をする中で、深刻な水不足に目を向け、用水路の建設に取り組みました。乾いた大地を緑豊かな農地へと変え、多くの人々の命と暮らしを支えました。

聖書には「受けるよりは与える方が幸いである」（「使徒言行録」20章35節）とあります。自らの欲を満そうとするより、他者に与えることに心を砕くことで人は幸せになれるということです。

カナダ留学中、先住民のある共同体では、多くのモノを持つ人より、多くを分け与える人が尊敬されると聞きました。

春学期の終業式に、私は「天に宝を積みましょう」と子どもたちに呼び掛けました。大切なものを他者に分け与え、自分の時間や力を誰かのために使うことは「天に宝を積む」ことになります。

自分のことのみを考えるのではなく、他者のため、社会のために生きようとする志を持つ子どもたちを育てることこそ、本校が掲げる「キリスト教主義」の根幹だと考えています。

校長 和田喜彦



キリスト教教育

11月：感謝 November：Gratitude

「アブラハムは凝乳と乳、そして調理された子牛を運んで来て、彼らの前に出した。
木陰で彼らが食事をしている間、彼はそばで給仕をした。」

創世記 18 章 8 節 （聖書協会共同訳）

秋学期の初め頃、6年生の修学旅行に同伴して広島県にある「久保アグリファーム」という農場を訪れた時のことです。この日、児童らは搾りたての牛乳と生クリームをもらい、「バター作り体験」をさせてもらいました（実は付き添いの教員数名も、体験させて頂きました！）作り方は至ってシンプルで、透明な容器の中に牛乳と生クリームを入れて蓋をし、ただひたすら振って中身が固まるのを待つだけです。しかしながらこれが案外難しく根気のいる作業で、振ってもふってもなかなか固まってくれず、そのうちにだんだんと腕がだるくなってきました。「そもそもこんな液体がそう簡単に固まるものか…」と疑問を持ち始めた頃、突然容器の内容物の音が変わり、ピチャピチャという音からカサコソという固形物の音になりました。そして、あっという間に手作りバターの出来上がりです。各自に配られたクラッカーに出来立てのバターを付けて頂くと、苦労した分、余計に美味しく感じられました。

上掲の聖書箇所は、旧約聖書に登場するアブラハムという人物が客人たちをもてなす場面です。実はこの客人たちの正体は神からの遣いで、アブラハムにとって非常に重要で喜ばしい知らせを告げに来たのですが、彼はそんなこととは全く知らずに、ただ熱い砂漠を旅してきた見ず知らずの人々を気の毒に思い、今の自分に出来る精一杯の御馳走を振る舞ったのでした。その御馳走の中に、家畜の乳から採れるバターもあったのです（「凝乳」とは、バターやヨーグルト、チーズなど乳製品の総称です）。もし彼が長旅のせいで薄汚れた旅人たちを客人とは思わず、けんもほろろにあしらっていたとしたら、この喜ばしい知らせを受け取ることはできなかったかも知れません。

（Christian Education Committee チャプレン 石川眞弓）



<久保アグリファーム>



<お知らせ>

- ・10月30日（金）収穫感謝礼拝 ※お米のご寄付をありがとうございました！
- ・11月10日（火）おにぎり献金

○国内：岩手キリスト教学園認定こども園宮古ひかり、福島県の若松聖愛幼稚園、熊本県の慈恵病院「こうのとりのゆりかご」、北陸学院キリスト教センター（石川県能登半島地震支援金口）・熊本 YMCA（2026年熊本地震救援・復興支援募金）

○海外：日本ユニセフ協会「人道危機緊急募金」

ご賛同頂ける方は、お子様に献金をお持ちくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

- ・11月27日（金）クリスマス点灯式

今年度は6時間目にチャペル内で行われます。参加者は児童・教職員と一部 SG 様に限られますので、ご丁承をお願い致します。

「G3 UNIT3 How We Express Ourselves」

3年生のUNIT3「How We Express Ourselves」では、「人は個性を様々な方法で表現する」というCentral Ideaのもと、人が自分自身を表現するために使うさまざまな方法について探究しています。

「表現する」というと、絵を描く、文章を書く、音楽を奏でるといったことを思い浮かべますが、実はそれだけではありません。ものをつくったり、何かを選んだり、誰かと関わったりする中にも、その人の思いや考えが表れます。このUNITでは、「どのようにして、すべての人が自分の独自性を表すのか」という問いを軸に、一人ひとりの感じ方や考え方の違いが、どのようにその人らしい表現につながっていくのかを考えています。そんな3年生が今回、川上村での宿泊学習に出かけました。本来は2泊3日の予定でしたが、大雨警報で初日の活動を中止することになり、楽しみにしていた時間が一日短くなってしまいました。それでも、陶芸やお面づくりなど、普段の学校生活ではなかなか経験できない活動が詰まった2日間となりました。

最初に取り組んだのは陶芸です。初めて触る粘土の感触を楽しみながら、子どもたちは、お皿やカップ、置物など、それぞれが作りたいたものを形にしていきました。粘土は、押せば形を変え、伸ばせば伸び、少し力を加えるだけでも姿を変えます。だからこそ、同じ材料から生まれた作品であっても、一つとして同じものにはなりません。大きさも形も仕上がりの雰囲気もさまざまです。そこには、「こうしたい」という一人ひとりの思いと、それを自分の手で形にしていた時間が表れていました。



続いて取り組んだのがお面づくりです。お面の土台は、形も大きさもみんな同じ。そこに、かなで削られた大小さまざまな木材を貼り付けていきます。子どもたちは木材を一つひとつ手に取り、触り、眺め、形や大きさを確かめながら、自分が使うものを選んでいました。同じ土台から始まったお面が、完成するころには一つひとつ違った表情を見せます。選ぶ木が違う。組み合わせ方が違う。貼



り付ける場所も違う。特別に「自分らしさを表そう」と設定した活動ではありませんでしたが、子どもたちが自分の目で見て、自分の手で触れ、「これを使おう」と選んだ一つひとつの積み重ねが、その子にしかつくりえないお面につながっていました。

「自分らしさ」は、何か特別なものを持っている人だけが表せるものではありません。何を選ぶのか、何を組み合わせるのか、どこにこだわるのか。そんな小さな選択の中にも、その人の感じ方や考え方は表れます。同じ材料を前にしても、できあがるものが違う。その違いこそが、それぞれの表現なのかもしれません。

今回の宿泊学習では、土に触れ、木に触れ、自分の手で選び、つくるといった経験を重ねました。陶芸とお面づくりは、一見すると単なるものづくりの活動にも見えます。しかしUNITの学びとして振り返ると、そこには「自分はどうしたいのか」を考え、それを自分なりの形にしていこうという共通点があります。友だちの作品を見れば、自分とは違う選択に出会います。その違いを知ることは、自分の表現を見つめ直すことにもつながります。表現には、一つの正解があるわけではありません。上手にできることだけが表現でもありません。考え、選び、試し、ときには迷いながら、自分なりの形をつくっていく。その過程そのものが、一人ひとりの表現になっていきます。

これからのUNITでは、今回の経験を振り返りながら、「どのようにして、すべての人が自分の独自性を表すのか」という問いをさらに深めていきます。川上村で触れた土や木、森や水、そしてそこで出会った人々の営みが、これからの子どもたちの探究を支える一つの材料になっていくことでしょう。



What is a mentor?- How we can support G6 students-

Dear Parents and Guardians,

As the weather becomes more pleasant, I hope this message finds you and your families well.

This time, I would like to talk about mentors.

As part of the Exhibition, G6 students reflect on whether they would benefit from having a mentor. A mentor is someone who supports students in their learning, and at our school, this role is fulfilled by Shotobu teachers. Students are encouraged to reflect on their own needs and circumstances and express whether they would like to have a teacher as their mentor.

The main role of a mentor is to provide support, motivation, inspiration, and coaching. However, mentors should never simply give students the “answers” or take action on their behalf.

Mentors also support students as they choose their Exhibition topics, develop their inquiry plans, and formulate their research questions. Throughout this process, mentors help students access relevant resources, develop their research skills, and analyze information, thereby facilitating their inquiry journey. Providing constructive feedback on how students approach their inquiries and helping them refine their presentations are also important aspects of a mentor’s role. Furthermore, mentors encourage students to reflect on their learning experiences and make connections to the PYP concepts.

During the Exhibition journey, students may encounter challenges and experience moments of uncertainty. At such times, mentors encourage them to take ownership of their learning and work through difficulties independently. For example, when students are unsure about what action they would like to take, mentors explore ideas with them by asking thoughtful questions and offering new perspectives. The key is that **students themselves make the choices.**

The role of a mentor is not limited to G6; it also has much in common with the way we support our children at home. We can be there for our children without immediately giving them the answers, instead asking, “What would you like to do?” and giving them the space to think for themselves and make their own choices. We hope you will continue to support your children with warmth and encouragement, while nurturing their independence and ownership of their learning.

Warm regards,

Aki Rojas, Vice Head of School

メンターとは？～G6 Exhibition をサポートするために～

保護者の皆様

過ごしやすい季節となりました。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

今回は、「メンター」についてお話ししたいと思います。

エキシビションにおいて、G6の児童は「メンター」の必要性について考えます。メンターは、児童の学びをサポートする役割があるのですが、本校では初等部の教員がそれを担います。児童は自分にメンターの先生が必要かどうかを自らの状況に照らして振り返り、希望を伝えることになっています。

メンターの主な役割は、「サポート、モチベーション、インスピレーション、コーチングを提供すること」です。ただし、決して児童に「答え」を伝えたり、児童に代わってアクションをしたりすることはありません。メンターは、児童がエキシビションのテーマを選び、探究の計画を立て、リサーチ・クエスチョンを作成する際にもサポートします。その過程で、児童が必要な情報源にアクセスし、リサーチスキルを磨き、情報を分析できるよう支援することで探究のプロセスを促進していきます。また、探究の進め方について建設的なフィードバックを行い、プレゼンテーションに磨きをかける手助けをすることも、メンターの大切な役割です。さらに、児童が自分の学習経験を振り返り、PYPのコンセプトと関連づけて考えられるよう促すことも重要です。エキシビションの学びの過程では、児童が壁にぶつかり、悩む時期もやってきます。そのようなとき、メンターは児童が主体性を持って学習に取り組み、自らの力で困難を乗り越えていけるよう励まします。例えば、児童がどのようなアクションをしたいのか迷っているときには、丁寧に問いかけたり、新たなアイデアを提案したりしながら一緒に考えていきます。大切なのは、児童自身が「選択」することです。

こうしたメンターの役割は、6年生に限らず、ご家庭でのお子様へのサポートにも通じるものがあります。お子様に寄り添いながらも、すぐに答えを与えるのではなく、「あなたはどうしたいの？」と問いかけ、お子様自身が考え、選択できるよう見守ること。ご家庭でも、お子様の主体性を大切にしながら、引き続き温かくサポートしていただければと思います。

副校長 ロハス亜紀



校庭を歩くと、つい先日まで子どもたちの歓声で満ちていた場所に、少し落ち着いた空気が流れていることに気づきます。10月のスポーツデイを終え、校内には少し違った時間が流れ始めました。大きな行事を終えた安堵感がある一方で、教師たちの視線は少しずつその先へ向かっています。

4月から始まった今年度も残すところあと5か月。子どもたちの日々の学校生活が続く一方で、学校では次年度に向けた準備も少しずつ始まっています。そんな今、小学校で働く一人の教師として、ふと考えることがあります。「学校というものは、いつの日か完成するものなのだろうか。」と。

違いの中で学ぶ

DIAにはさまざまな背景を持つ教員がいます。日本人教員だけでなく、異なる国や文化、言語を背景に持つ教員と一緒に働いています。同じ学校で同じ子どもたちのために働いていても、「当たり前」と考えていることが少しずつ違うことがあります。仕事の進め方、時間の捉え方、意見の伝え方、相手との距離の取り方。日本の学校文化の中では自然だと思っていたことが、別の文化の中では必ずしも同じようには受け取られないこともあります。もちろんこれは教員同士に限ったことではありません。学校とご家庭との間でも、考え方や受け止め方の違いから思いがうまく伝わらないことがあります。

そうしたとき人はどちらが正しいのかを考えたくになります。しかし本当に大切なのは、どちらか一方を正しいとすることではないように思うのです。「なぜ自分はそう考えるのだろうか。」「相手はどんな気持ちからそう考えているのだろうか。」と立ち止まる必要があるのかもしれません。違いに出会ったとき、自分自身の当たり前を問い直してみる。それは決して簡単なことではないでしょう。

異なる言語を話す教員同士が意思を伝え合うために、学校でもさまざまな工夫をしています。しかし言葉を翻訳することと、その言葉の背景にある思いや価値観まで理解することは同じではありません。だからこそ伝えること、聴くこと、確かめること、そして必要であれば考え直すことが求められます。教師もまた、日々そのことを学んでいるのだと思います。

学校には「ここまでできれば完成」という地点がありません。教育を取り巻く環境は日々変わります。子どもたちも変わります。保護者も変わります。社会も変わります。そしてそこにいる教師自身も変わっていきます。それでもこれまで大切にしてきたものを守りながら、今のままでよいのだろうかと問い続けることが必要なのだと思います。

同志社が大切にしているキリスト教主義、国際主義、自由主義。そして新島襄先生から受け継がれてきた良心教育。これらは学校がどのような方向を目指すのかを考える上での太い軸です。その軸をもとにIB教育やバイリンガル教育を実践し、今の子どもたちにとってよりよい学びとは何かを考えていく。受け継いできたものを守ることと変わっていくことは、決して反対ではないのだと思います。むしろ変わらないものを守るためには、時代や環境に応じて変えていかなければならないこともあります。学校も、教師も、歩みの途中にあるのだと最近よく考えるのです。

教師自身も学びの途中

教師だからといって、すべてを知っているわけではありません。経験を重ねれば重ねるほど、教育には一つの答えでは解決できないことがたくさんあると感じます。子どもとの関わりの中で迷うこともあります。教員同士で意見がぶつかることもあります。保護者の皆様と考えが一致しないこともあります。しかしそうした出来事を「うまくいかなかったこと」として終わらせるのではなく、そこから何を学び、次にどう生かすのか。その姿勢こそが学校を少しずつ前へ進めていくのではないのかと思います。

IB教育では「生涯にわたって学び続ける人」という姿が重視されています。それは子どもたちだけに求められるものではありません。子どもたちに「違いを尊重しましょう。」「自分で考えましょう。」と伝えるのであれば、まず私たち教師自身が違いの中で考え、迷い、学び続ける存在でありたいと思います。

余白のある学校へ

学校には「余白」が必要なのだと私は思います。すべてを決め、すべてを整え、すべてに答えを用意してしまえば、学校は一見するととても整った場所になるかもしれません。でも余白がなければ、新しい考えが入り込む場所も、自分の考えを見直すきっかけも生まれません。違う意見が出ること。思うように伝わらないこと。「本当にこれでよいのだろうか。」と立ち止まること。一見すると遠回りに思える時間の中にこそ、学校が次の姿を考えるための時間があるのではないのでしょうか。

学校は完成しません。だからこそ教師も学び続ける。学校も問い続ける。そして一人では見つけられなかった答えを、異なる誰かと出会う中で探していく。

11月。年度の後半を歩みながら、学校の中では次の一年のことも少しずつ動き始めています。今あるものを大切にしながら、まだ見えていない可能性のための「余白」も残しておく。そんな学校でありたいと改めて思っています。私自身も学務幹事として、そして一人の教師としてまだまだ学びの途中です。これからもDIAが変わらない大切なものを胸に抱きながら、必要なことには柔軟に向き合い、よりよい学校の姿を問い続けていける場所であるように、子どもたちと、保護者の皆様と、そしてDIAに関わるすべての方々とともに歩んでいきたいと思っています。



お知らせ

「第九」

1924年11月29日、この日 東京音楽学校(現、東京藝術大学)がドイツ人指揮者グスタフ・クローンのもと 公開の全曲初演を行いました。100年以上も前から日本人が「第九」を聴いていたなんて驚きですね(しかも同志社の創立記念日!)。今月はそんな音楽に関する本を集めてみました。

*お話の紹介文は出版者のHPから抜粋しています。

『BEETHOVEN / great composer.』

Anna Carew-Miller, Vitali Konstantinov, 出版者 Mason Crest



ドイツ生まれの偉大な作曲家。耳が聞こえなくなるがそれでもなお意欲的に作曲活動をした、そんな彼の伝記本です。イラストも多く読みやすくなっています。

『音のひみつがすべてわかる! すごすぎる音楽の図鑑』

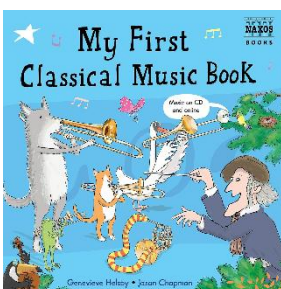
監修 反田恭平著者 ジャパン・ナショナル・オーケストラ 出版者 KADOKAWA



大人気『すごすぎる図鑑』シリーズに、「絵画」に続くカルチャー系の新テーマ「音楽」が登場! 今、日本で最も注目されるピアニスト・指揮者の反田恭平氏と、主宰する「ジャパン・ナショナル・オーケストラ」の全面協力による、クラシック音楽を主としながら「音」や「音楽」について多面的に取り上げた、今までにない内容です。音楽の起源や楽譜の読み方など、楽器を習っていない子どもや大人でも楽しめるよう基礎・基本の解説も充実。単なる楽器や作曲家の紹介にとどまらない、現役の演奏家ならではの感性を取り入れたトリビア満載の一冊です!

『My First Classical Music Book: Book & CD (Naxos My FirstSeries)』 by Genevieve Helsby

出版者 Naxos Books



『My First Classical Music Book』は、5歳から7歳の子どもの想像力をかき立てるために設計された、カラフルで楽しいクラシック音楽入門書です。読者は音楽が聴けるさまざまな場所について考えるよう促されます。その後、主要な作曲家や楽器のファミリーが鮮やかで魅惑的に紹介され、命を吹き込まれます。卓越した本であり、目と耳の両方に引き込まれる体験を提供します。

11月の主な行事・予定

11日~13日 G4宿泊学習
18日~20日 G5 宿泊学習



1	日	
2	月	Unit4(week3)
3	火	文化の日
4	水	クラブ活動
5	木	
6	金	月の光公演(保護者対象)
7	土	きずな祭
8	日	
9	月	Unit 4 (week 4)
10	火	
11	水	委員会活動 G4 宿泊学習
12	木	G4 宿泊学習、G6 国際中推薦入試
13	金	G4宿泊学習
14	土	
15	日	
16	月	Unit4(week5)
17	火	
18	水	G5 宿泊学習
19	木	G5 宿泊学習
20	金	G5 宿泊学習
21	土	
22	日	
23	月	勤労感謝の日
24	火	Buffer week
25	水	クラブ活動、学期報告会~11/27
26	木	
27	金	点灯式
28	土	G6 同志社香里中学校推薦入試
29	日	創立記念日
30	月	Unit 5 (week 1)、創立記念礼拝

ピアノ
ソネット
テスト

12/1 (火)	私小連教員研修会(午前授業・昼食なし)
12/4 (金)	クリスマスページェント
12/11 (金)	SPT カンファレンス(午前授業)
~12/14 (月)	
12/17 (木)	午前授業
12/18 (金)	終業礼拝(午前授業)